

# 千歳に住んでみて

石 田 宏 司

千歳科学技術大学光科学部教授

平成十年に二十六年間勤めた会社を辞めて新設の千歳科学技術大学の教員となった。早いもので来年の三月でまる十年になる。私は札幌の街中で生まれて育ち、大学を出て東京の企業に就職するまで二十数年間を札幌で過ごしたので千歳はなじみの場所であつたが、いつも通過するだけで街の様子はほとんど知らなかった。しかし住んでみると大変良いところで、今ではすっかり腰を落着けてしまった。ここでは千歳に住んでからのことを少し書いてみようと思う。

## 一 支笏湖のこと

千歳についての初めての記憶は小学校五年生の修学旅行である。このときは千歳市経由でサケマス孵化場を見学した後支笏湖に向かった。孵化場までの千歳川沿いの道や、千歳から支笏湖に向かう森林の中に続くわずかに起伏のあるまっすぐな道、木々の間から初めて見えた支笏湖の風景を今でもかなり鮮明に記憶している。そのあとも就職して札幌を離れるまでずいぶん何度も支笏湖を訪れた。

大学二年の時には湖畔から船でオコタン荘に行き、翌日オコタンペ湖まで沢沿いに歩いて往復した。藪をかき分けてオコタンペ湖を初めてみたときには、その静かな佇まいに本当に感激した。札幌から千歳を経由

せずに直接支笏湖に出る道路ができてからは、週末にお弁当を持って支笏湖に出かけ、湖畔一周道路の適当なところに車を置いて数時間過ごすのが楽しみであつた。

夏に家族全員十数人でオコタン荘でキャンピングをしたことも忘れられない。オコタン荘から徒歩十分ほどのところに支笏湖グランドホテルがあり、いつかこのような優雅なホテルに泊まりたいものだと思っていたが、知らぬ間にこのホテルがなくなってしまったのは残念であつた。

千歳に来てから一年ほどして家を建てて腰を落着けることにした。市内をいろいろ歩いて土地を探し、結局千歳川と支笏湖に近いことが決め手となって緑町に決めた。

## 二 ガーデニング

家を建てたのは千歳に来てから二年目である。土地付きの家に住むのは親の家を出て以来初めてであつた。最初の年は広くはない庭に芝生を張ってほんの少しの花と木を植えた。少しは庭を格好良くしようといういろやつて見たが、ぜんぜんさまにならない。恵庭の恵み野にはすばらしい庭がたくさんあると聞いて、「北海道オーブンガーデン」の本を手



写真-1 支笏湖グランドホテル（昭和 37 年の観光パンフレット）

に休みのたびに女房と二人であちこちの庭を見て歩いた。数多くの庭を見ているうちにだんだん自分たちの好みはつきりしてきた。長いこと山登りを続けてきたせいか、人工的なにおいのするものより自然に近い庭が好ましい。しかしながら庭に関しては素人の我々が、どのようにしたらそのような庭が作れるか、さっぱり見当がつかない。ガーデニングの業者に二、三あたって設計をしてもらったが、どうもイメージが合わない。結局、恵み野のガーデニングの草分けの一人である恵庭の谷村みねさんにいろいろと教えてもらいながら業者の手を借りずに自分たちで庭造りをすることにした。家を建ててから二年後のことである。

最初に木を何本か植えた。千歳、恵庭、北広島、早来などの植木屋さんをまわり「あおはだ」、「つりばな」、「やまぼうし」など株立ちで枝が風にそよぐ風情を感じられるような木を選んだ。そして植えた木々の間の隙間を土が見えなくなるよう毎年草花を植えていった。緑を主体にして宿根草しゅこんそうを多くし、花の色は少なめに抑えた。このようにして三年ほどたつと草木の種類も百種を越え、少しずつ格好がついてきた。素人でもやればできるものである。ときおり庭好きの方々が訪れ、声をかけてくれるようになった。昨年の六月にはある人に紹介されたといって千歳市の広報誌の取材を受けた。「家庭のオアシス」という市内の庭などを紹介する半ページのコラムの取材である。配布された七月号の広報誌を見るとコラムのほかに表紙に我が家の庭の写真が使われていてびっくりした。

ガーデニングをはじめて良かったと思うことがいくつかある。まず知り合いの輪が広がった。千歳・恵庭にかぎらず、札幌周辺、苫小牧、月形、三川、北広島などの人たちとも仲間が出来た。マンション住いをしていた東京では庭を通じた知り合いができるなどとは考えられなかった

ことである。近くに住む小学生たちも何人か我が家の庭に遊びに来るようになった。花の水遣りや落ち葉の掃除などを手伝ってくれる。四年ほど前からは秋のハローウインの季節に子供たちと一緒にかぼちゃのランタンを作って庭に飾っている。

五年前に本格的にガーデニングをはじめたときにはどちらかというと女房主導であったが、今ではまったく対等のパートナーであると思っ  
ては思っている。ただし彼女がどう考えているかはまた別の話である。六十歳を過ぎてから朝早く目が覚めるようになったこともあって「朝の農作業」と称して朝食前に一、二時間庭の世話をしてから仕事に出かけるのが日課となった。

夏には毎年研究室の学生を招いて庭でバーベキューパーティーをするのが恒例である。学生にはなかなか好評である。卒業生が帰省した折に訪ねてきて「先生の家でのバーベキューパーティーが忘れられません」などとヨイショされたとき、顔がほころびかけるのをじっとこらえてさりげない顔で「そんなものかね」などと答えるのはなかなか気分がよい。

### 三 千歳の自然

千歳は住んでみるまで「空港の街」、「自衛隊の街」というイメージが強く、こんなに自然が近い街であるとは知らなかった。我が家から千歳川までは徒歩三分、スポーツセンター横の坂を上って青葉公園の入り口の図書館までも十分ほどである。千歳川沿いの自転車専用道路を高速道路の下まで往復すると約四十分と散歩に手ごろなので、よく早朝に散歩をする。毎日同じ道を歩いていると四季の移り変わりが良く判る。

雪が消えるとすぐに藪ふきの臺とうや土筆つくし、スミレ、エゾノエンゴサク、エンレイソウなどの野草が川のほとりや青葉公園の道沿いに一斉に咲き始め



写真-2 千歳湖近くのみずばしょうの群落

る。そしてこぶしが咲き、桜が咲いて新緑が萌え始める。秋には紅葉と川の流れのコントラストがとても美しい。青鷺あおさぎや四十雀の仲間たちの野鳥の囀りさえずりも何時も聞こえる。晩秋から冬にかけては千歳川の川面に川霧が見られる。川霧という美しい日本語の響きをもつ風景を身近に経験できるとは、ここに住むまでまったく思っても見なかった。

このような四季の移り変わりを毎日身近に見ることが出来るのは大変な贅沢のように思える。事実東京から遊びに来る友人らを青葉公園や千歳川沿いの林東公園などに案内すると決まって羨ましがられる。都会に住んでいる人たちから見ると、このような自然に恵まれたところに住んでいるのはやはり大変な贅沢と思うらしい。

千歳科学技術大学の回りも自然に恵まれている。私の研究室がある実験研究棟から徒歩十分のところ  
にそれは見事なみずばしょうの群落がある。毎年四月の末から五月初旬にかけて、みずばしょうの白い花が数キにわたって咲く。尾瀬のみずばしょうよりもやや小ぶりであるが、一面に咲き乱れるさまと人気がまひとけったく無いという点ではかなり上を行くと思う。ただ、このように自然に恵まれたわが大学のキャンパスが、どちらかといえば都会志向の受験生たちにはあまり魅力のポイントとはならないことはまことに残念

である。

#### 四 千歳の人たち

千歳に来て十年足らずの間にずいぶんたくさんの人たちと知り合うようになった。今住んでいる緑町五丁目町内会はとてもまとまりが良く、総会をかねた新年会、春の観桜会、秋の観楓会の年三回の懇親会を行うが、女性部の活躍によって料理はすべて手作りなのでその労力の分参加しやすい会費で出来るため、参加者は毎回六割を超える。町内には東川孝前市長、米田忠彦道議会議員、伊藤博邦前教育委員長ら千歳の著名人も多いが、町内会の集まりでは皆さん宴会仲間である。

日常のことでもずいぶんお付き合いが深い。畑で取れた野菜のおすそ分けなどはいつものことで、お彼岸のおはぎや何かのお祝い事の手作りのお寿司のやりとりなど、東京や札幌の街中では廃れてしまった近所のお付き合いがある。何時だったか研究室の学生を呼んで、恒例のバーベキューパーティーのときに近所の方から学生さんといって手作りのおつまみの差し入れをいただいたことがある。地域ぐるみで学生を大事にしてくれ、まことにありがたいものである。

すぐ近くに緑小学校があり、校長先生と教頭先生は学校の横の公宅に住んでいるので当然のことながら町内会の集まりでは一緒になる。私が緑町に来たときに当時の中村福彦校長から町内会の集まりのときに理科実験授業をたのまれ、それ以来毎年一年に一度四年生に授業を行っている。これが契機となって千歳科学技術大学の理工工場の学生が五年生、六年生にも実験授業を行うようになった。

五年ほど前から私の女房も図書ボランティアとして緑小学校で主に一、二年生に朝の読み聞かせを行っている。今年の春からは緑小の花壇の手



写真-3 緑小学校での実験授業

入れも手伝っている。現在の白倉雅治校長先生、石黒隆一教頭先生も最初の中村先生と同様親しくお付き合いをさせていただいている。石黒先生はカヌーのベテランで、先生の指導により昨年秋季には美々川をそして今年の五月には千歳川をカヌーで下るという初めての経験をさせてもらった。これも千歳ならではのことがある。

三年前に市役所から都市経営会議の委員の委嘱を受けた。委員の総数は約二十名で年齢は三十代から七十代まで、主婦、会社役員、市役所職員、教員など職業もさまざま、選出方法も自薦、団体推薦など多種多様な人たちの集まりであった。このような多様な人たちが集まった委員会では、市民協働推進条例などという難しいものを議論してまとまるものだろうかと最初は危ぶんだのだが、意外や意外毎回熱心に議論を行う中でお互いの気心が知れてくるとともにとても良い雰囲気となり、委員会の任期終了後も年に数回勉強会と称して飲み会を開いている。

千歳には古くからこの土地に住んでいる人ばかりではなく、よそから移り住んできた人も多いようである。仕事の関係で千歳に来て千歳に住むようになり、退職後も、そのまま千歳に住み続ける人のほかに、千歳の自然が気に入ってここに住むようになった人も居る。市内のおすし屋さんで知り合った嶋田忠さんもその一人である。その時は世界的に高名

な野鳥の写真家であるとは失礼ながらも知らなかった。嶋田さんは野鳥の撮影に適した場所を日本中探しているうちに千歳が気に入り、二十数年前から住んでいるという。今年の三月五日NHKのハイビジョン特集で放映された嶋田さんの「清流のハンターカワセミを追う」はカワセミやヤマセミなど千歳川にすむ野鳥を一年かけて撮影したもので千歳川の四季がとても美しく、嶋田さんのこの川に掛ける思いが伝わってくる。このまま千歳市のPR映像に使えると思えるくらいである。

また、緑小学校の評議員会で一緒だった鳥畑博嗣さんはカヌーで有名な方で、ドイツでカヌーの仕事を何年かされた後帰国するに当たって、カヌーに最適な川を日本中探した中から千歳川を選びここに住むことにしたと聞いている。

千歳が全国でもまれに見る自然に恵まれた街であることは、もしかしたら千歳に長く住んでいる人よりもよそから移り住んだ人のほうがより感じているかも知れない。

自然環境のすばらしいところは全国にたくさんあると思うが、ある程度の人口をもち、そのうえ空の便も含めたアクセスのよさと自然環境の両方を兼ね備えているところは他に無いと思う。このような特色を活かしてもっと千歳が元気の出る街になることが出来ないかなどと思っている。